様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０１５４８

研究課題名（和文）精神障害患者の希望・決定・実行を援助する急性期リハビリテーション介入の効果

研究課題名（英文）The psychiatric rehabilitation of attaching importance to severe mental illness patients' wish, decision and performance for their recovery life in the community

研究代表者
橋本　健志（Hashimoto, Takeshi）

神戸大学・保健学研究科・教授

研究者番号：６０２９４２２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：統合失調症をはじめとする急性期精神障害患者の希望・決定・実行を援助するリハビリテーション介入技法を確立するために、本研究を実施した。１）多職種訪問支援対象の精神障害患者91名を後方視的に一年間調査した結果、自ら外出し福祉資源を利用できる者は精神科病院への入院率が低かった。２）希望に基づいて地域社会資源について自己学習 することによって、患者の健康感および陰性症状が改善した。
３）訪問リハ介入時の患者と医療関係者の安全について検討するために訪問看護師を対象に調査を実施した。
４）希望・決定・実行を尊重したリハビリテーション介入が暴力や虐待の出現を抑制し、地域生活が可能となった事例を報告した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
精神障害者のリカバリー指向のリハビリテーションの重要性が指摘されているが、急性期精神障害者に対するリハビリテーション介入技法は確立されていない。本研究では、統合失調症などの精神障害患者の希望・決定・実行を援助するリハビリテーション技法の確立を目指し、技法を実践しその効果を検証した。自ら外出し福祉資源を利用できるような訪問リハプログラムとすること、患者の希望に基づいた地域社会資源の自己学習の要素を取り入れること、医学知識を利用ながら生活の場での活動に介入すること、急性期患者を対象とする時には安全性に配慮したプログラムとし介入者を心理的に支える仕組みを包含することが重要であることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：We examined the effects of 'the psychiatric rehabilitation of attaching importance to severe mental illness patients' wish, decision and performance for their recovery life in the community'. 1) Among 91 patients who received multidisciplinary outreach support, those who had never used welfare resources are likely to be hospitalized. 2)In addition to usual programs, the intervention group studied social resources independently, using the developed slides on a PC, showing the improvements in the negative symptoms and the subjective physical health scores. 3)In common home-visit settings, 38 of 94 nurses had experienced violence (mainly verbal abuse), indicating that the provision of support and a safe environment is important in the psychiatric rehabilitation. 4)This rehabilitation could rebuild an adult ADHD patient life by utilizing medical knowledge of disability characteristics and expert knowledge of their occupation.

研究分野：精神障害リハビリテーション

キーワード：精神障害　リハビリテーション　急性期　統合失調症　社会参加　訪問　地域

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

精神障害をもつ者のリカバリー指向のリハビリテーションの重要性が指摘されているが、急性期精神障害者に対するリハビリテーション介入技法は確立されていない。

２．研究の目的

本研究では、統合失調症をはじめとする急性期精神障害患者の希望・決定・実行を援助するリハビリテーション介入技法を確立し、効果を検証し、それにより精神障害者の社会参加に貢献することを目的とする。

３．研究の方法

１）急性期精神障害患者の希望・決定・実行を援助する精神科リハビリテーション介入の確立

地域生活する精神障害患者 91 名の経過について１年間後方視的に追跡し解析し、急性期症状の悪化・再燃に対して予防的に働くリハビリテーション介入因子について検討した。

２）希望・決定・実行を援助する精神科リハビリテーション介入の臨床効果

統合失調症患者が地域のモノや福祉制度などの社会資源を患者自身の希望に応じて主体的に学ぶことができるように学習環境を設定し、この自己学習によって、地域生活上の障壁となっていた自身の健康感/不健康感と陰性症状にもたらされる効果について多施設ＲＣＴ手法を用いて検討した。

３）希望・決定・実行を援助する精神科リハビリテーション介入の安全性について

希望・決定・実行を援助する精神科リハビリテーション介入の安全性を高めるための方策検討のために調査研究を実施した。

４）希望・決定・実行を援助する精神科リハビリテーション介入の地域展開について

希望・決定・実行を援助する精神科リハビリテーション介入を臨床で実施し、患者の社会の参加が実際に実現するかどうかについて検討した。

４．研究成果

１）精神障害患者の急性期症状の悪化・再燃予防をもたらすリハビリテーション介入

多職種訪問支援対象の精神障害患者 91 名（統合失調症 62 名、統合失調感情障害 17 名、妄想性障害 3 名、気分障害 9 名）を後方視的に一年間調査した結果、自ら外出し福祉資源を利用できる者は精神科病院への入院率および再入院率が低いことを報告した。したがって地域生活する精神障害患者への訪問支援においては、地域の精神障害者が他者とつながり他者と関係性を構築・維持できること、それが実現するようにリハビリテーション介入することが、症状の悪化・再燃を防ぎ、精神科病院への入院を減らす可能性が高いことを示した（真下ら、精神障害とリハビリテーション 2016）。

２）地域社会資源の自己学習は、自身の主観的健康感および客観的陰性症状を改善する

これまでは、社会資源の情報は医療職・福祉職・行政職から患者に一方向性に与えられることが多く、パターナリスティック（父権主義的）な情報提供であった。そこで、研究者らは、統合失調症患者が地域のモノや福祉制度などの社会資源を患者自身の希望に応じて主体的に学ぶことができるように学習環境を設定した。この自己学習によって、地域生活上の障壁となっていた自身の主観的健康感/不健康感が改善し客観的陰性症状も軽快した。この結果は、希望・決定・実行のプロセスの入り口である希望を表出しやすいように、周囲が社会資源の情報を準備することが肝要であることを示唆する。こうした工夫こそが、自己学習を促進し、ひいては希望・決定・実行を促進し、活き活きとした地域生活実現のきっかけとなりうる（西村ら、作業療法学会 2017 と国際作業療法学会 2018 で報告し、現在国際誌に投稿中）。

３）安全性：急性期リハビリテーション介入時の患者と医療関係者の安全性の確保について

万一暴力事象が生じると、患者の回復には負の影響をもたらす。そして同時に、訪問看護・リハを中心とする地域リハビリテーションの介入内容に修正が必要となる。そこで、地域で暴力事象の現状を把握しその予防対策を講じるために、訪問に係わる医療者の暴力暴露状況と対策の実施状況について調査研究を実施した。訪問看護者の約半数がこれまでのキャリアの中で訪問時の暴力に遭遇していること、暴力予防対策および暴力事後対策もほとんど実施されていないことを報告した（Fujimoto ら、Psychosoc Nurs Ment Health Serv. 2019 および J Psychiatr Ment Health Nurs. 2017）。したがってリハ介入においても喫緊に安全性対策を充実させる必要性がある。

４）臨床展開：希望・決定・実行を尊重したリハビリテーション介入が暴力や虐待の出現を抑制し、地域生活実現への効果について

地域生活する精神障害患者の中には、家事や育児などを遂行する際の困りごとから、孤立し、孤独感が生じ、そのために二次的に暴力や虐待が生じて事例化し入院を繰り返すことがある。入院対応や施設入所対応は緊急時にはやむを得ない措置であるが、患者と家族が地域生活を希望し、安全に地域で生活するためには、患者と家族のニーズを適切に把握し他職種連携のもとで細やかに地域における支援を実施する必要がある。本研究課題の一貫として、オンサイトにおける希望・決定・実行を尊重したリハビリテーション介入によって、気分障害を合併する成人期 ADHD 患者が、本介入によって暴力や虐待の再発生を回避し、地域生活が可能となり、母親としての役割を果たしながら社会への再適応する過程を事例として報告した（真下ら、作業療法 201９）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　8　件）

１．Experiences of Violence and Preventive Measures Among Nurses in Psychiatric and Non-Psychiatric Home Visit Nursing Services in Japan. Fujimoto H, Greiner C, Hirota M, Yamaguchi Y, Ryuno H, Hashimoto T. J Psychosoc Nurs Ment Health Serv. 2019 Apr 1;57(4):40-48.　doi: 10.3928/02793695-20181023-04. Epub 2018 Nov 1. [査読有り]

２．Violence exposure and resulting psychological effects suffered by psychiatric visiting nurses in Japan. Fujimoto H, Hirota M, Kodama T, Greiner C, Hashimoto T. J Psychiatr Ment Health Nurs. 2017 Oct;24(8):638-647.　doi: 10.1111/jpm.12412. Epub 2017 Aug 24. [査読有り]

３．Text Messaging for Psychiatric Outpatients: Effect on Help-Seeking and Self-Harming Behaviors. Kodama T, Syouji H, Takaki S, Fujimoto H, Ishikawa S, Fukutake M, Taira M, Hashimoto T. J Psychosoc Nurs Ment Health Serv. 2016 Apr;54(4):31-7.　doi: 10.3928/02793695-20160121-01. [査読有り]

４．併存障害を有する成人期 ADHD 患者に対する訪問作業療法の意義. 作業療法　38 , 1 , 87-95 2019/01　[査読有り]

５．長期入院統合失調症患者の生活機能と症状の関連. 胡　友恵,澤田　智則,　川嶋　祥樹,四本　かやの,　橋本　健志. 作業療法 37 , 3 , 1-6　2018/06　[査読有り]

６．運動を他者と一緒に行うことが統合失調症の気分状態と精神症状に及ぼす影響. 神志那 武, 四本 かやの, 武田 敏伸, 橋本 健志. デイケア実践研究 21(2) 3-9　2018 年 3 月 [査読有り]

７．指標を用いた体調自己チェックが統合失調症患者の生活機能に与える効果. 早川　智美, 四本　かやの, 北林　百合之介, 橋本　健志. デイケア実践研究　20(2) 141-148　　2017 年 8 月　[査読有り]

８．多職種訪問支援中に入院に至る精神疾患患者の特徴について：後方視的解析研究 真下 いずみ, 四本 かやの, 角谷 慶子, 橋本 健志. 精神障害とリハビリテーション 20(2) 160-168 2016 年 11 月 [査読有り]

〔学会発表〕（計　16　件）

１．希望する作業の遂行により，新たな希望を持った長期入院統合失調症患者の事例. 胡　友恵, 澤田　智則, 川嶋　祥樹, 橋本　健志, 四本　かやの、第 52 回日本作業療法学会　2018 年 9 月

２. 精神障害者に対する多職種訪問支援に作業療法士が加わることの意義 ―パイロットスタディ― 真下　いづみ, 四本　かやの, 橋本　健志、第 52 回日本作業療法学会　2018 年 9 月

３．統合失調症を持つ方のパソコン操作スキルと認知機能の関連について. 森本　かえで, 四本　かやの, 田中　千都, 橋本　健志、第 52 回日本作業療法学会　2018 年 9 月

４．不慣れな作業への不安が高い社交不安症状をもつ統合失調症患者に対する作業療法. 森本　優香, 山本　敦子, 四本　かやの, 柏木　陽介, 木下　利彦。第 52 回日本作業療法学会

2018 年 9 月

５．精神科通院患者における悩みの特徴および援助希求行動に関連する要因. 児玉豊彦、田村裕子, 小森照久, 片岡三佳, 井倉一政, 橋本健志. 第 114 回日本精神神経学会 2018 年 6 月

６．Impacts of the self-study of social resources on negative symptoms and quality of life in people with schizophrenia who are long-term users of psychiatric day　programs. 西村　優子, 四本かやの, 橋本　健志. World Fedelation of Occupatuonal Therapy Congres 2018　2018 年 5 月

７．Relationship between functioning and psychiatric symptoms in long-term inpatients with schizophrenia in Japan. 胡　友恵, 澤田　智則, 渡部　貴史, 橋本　健志, 四本　かやの. World Federation of Occupational Therapy Congress 2018　2018 年 5 月

８．患者と家族介護者間の手紙交換による患者 ADL の改善 . 中山 未央、四本 かやの, 小西 崇子, 川邊 利恵, 橋本 健志、第 25 回日本ホスピス・在宅ケア研究会 全国大会 2018 年 5 月

９．希望する作業を行うことが長期入院統合失調症患者の生活に与えた影響. 笠嶋慶子、岡本美紀、橋本健志、四本　かやの、第 17 回東海北陸作業療法学会 2017 年 11 月

１０．職場定着支援に求められるもの～働きはじめ、不安定な時期に必要な職場定着支援とは～ 岡坂　哲也、北岡　祐子、徳田　篤、宮﨑　理慧、高松　桃子、橋本　健志、第 26 回日本精神障害者リハビリテーション学会 2017 年 11 月

１１.「人疲れ」感が持続する統合失調症者に対する訪問時共同作業の有用性. 大畠　久典, 平良勝, 四本　かやの, 鈴木由美子, 中谷　恭子, 橋本　健志、第 26 回日本精神障害者リハビリテーション学会　2017 年 11 月

１２.社会資源情報の自己学習がデイケアを長期利用している統合失調症患者の陰性症状と QOL に及ぼす影響. 西村　優子, 四本　かやの, 橋本　健志、第 51 回日本作業療法学会 2017 年 9 月

１３．長期入院統合失調症患者の生活機能と症状の関連. 胡　友恵, 澤田 智則, 渡部 貴史, 橋本 健志, 四本　かやの、第 51 回日本作業療法学会　2017 年 9 月

１４．職場定着支援に求められているもの　～利用者から学ぶ１０ヶ条～ 徳田篤、北岡祐子、岡坂哲也、宮﨑　理慧、高松桃子、橋本　健志. 第 25 回日本精神障害者リハビリテーション学会 2016 年 12 月

１５.急性期統合失調症患者の退院時の主観的気分に影響を与える要因. 森本かえで、田中千都、橋本　健志、四本かやの 中村　久哉 、平野　秀実. 第 50 回日本作業療法学会　2016 年 9 月

１６．人疲れを感じている統合失調症患者に対する共同作業を伴う訪問作業療法の試み
大畠久典,平良勝,鈴木由美子,三原初穂,橋本健志. 第 50 回日本作業療法学会　2016 年 9 月

〔図書〕（計　0　件）
〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：
○取得状況（計　0　件）
名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://www.ams.kobe-u.ac.jp

６．研究組織
(1)研究分担者
研究分担者氏名：四本　かやの
ローマ字氏名：Yotsumoto Kayano
所属研究機関名：神戸大学
部局名：保健学研究科
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：10294232

研究分担者氏名：藤本　浩一
ローマ字氏名：Fujimoto Hirokazu
所属研究機関名：神戸大学
部局名：保健学研究科
職名：助教
研究者番号（8 桁）：20467666

研究分担者氏名：平良　勝
ローマ字氏名：Taira Masaru
所属研究機関名：神戸大学
部局名：医学研究科
職名：医学研究員
研究者番号（8 桁）：30444574

研究分担者氏名：大畠　久典
ローマ字氏名：Ohata Hisanori
所属研究機関名：神戸大学
部局名：保健学研究科
職名：保健学研究員
研究者番号（8 桁）：40726014

研究分担者氏名：渡部　貴史
ローマ字氏名：Watabe Takashi
所属研究機関名：神戸大学
部局名：保健学研究科
職名：助教
研究者番号（8 桁）：80758847

(2)研究協力者
研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。